

【3】 児童の実態

(1) 児童の実態

小学部の児童は、表-2のような学年でクラス編成している。また、表-3のような主たる障害を持った児童により構成されている。

表-2 学年別実態

学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計
人数	3人	1人	2人	4人	3人	4人	17人
学級	1組		2組		3組		

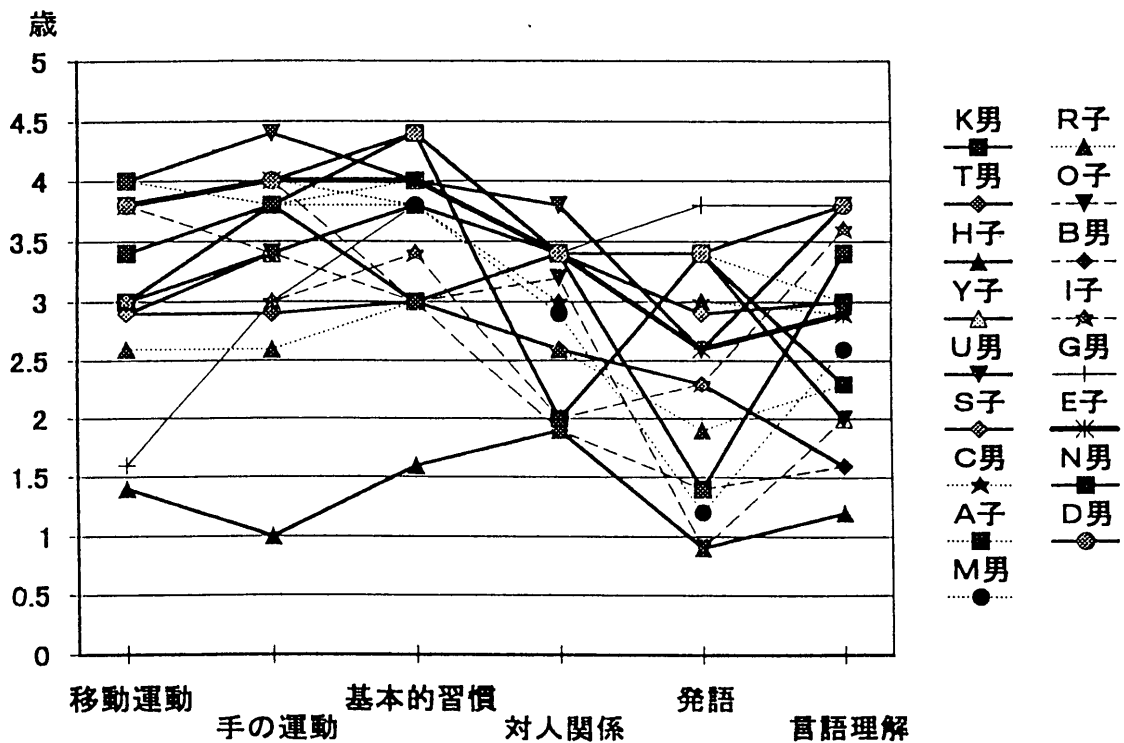
表-3 障害別実態

	ダウン症	染色体異常	てんかん	脳腫瘍後遺症	自閉的傾向	もやもや病	精神発達遅滞のみ
人数	5	1	6	1	1	1	2

(2) 発達検査による実態

児童の実態を遠城寺式乳幼児発達診断検査でみると、図-1のようになる。2歳から4歳の発達を示している児童が多い。個人内差を見ると、運動や生活習慣は全体的に高い数値を表しているが、言語に関しては落ち込んでいる児童が多い。

図-1 遠城寺式乳幼児分析的発達診断検査



児童の実態を新版K式発達検査でみると、表-4のようになる。2歳児群が17名中9名である。個人内差を見ると、言語・社会領域が、認知・適応領域よりも低い児童は、17名中11名である。

表-4 新版K式発達検査の発達診断の結果

	学年	検査実施日	生活年齢	障害名	発達年齢			発達段階の推定
					全領域**	認知 適応	言語 社会	
H子	1*	97. 4. 21	6:5	てんかん	1:0	1:1	0:11	1歳前半児群 (1次元形成期)
R子	3	96. 12. 12, 97. 3. 12	8:9	ダウン症	1. 11	2:2	1:9	1歳児後半児群 (1次元可逆操作期)
T男	1*	97. 5. 13	6:9	ダウン症	2:9	2:9	2:8	2歳児群 (2次元形成期初期)
Y子	1	97. 1. 29, 1. 31	7:1	てんかん	2:11	2:10	3:0	
A子	3	96. 12. 20	9:3	MR	2:11	2:9	3:1	
M男	3	97. 1. 20	9:3	ダウン症	2:6	2:11	2:0	
C男	3	96. 12. 13, 97. 3. 11	9:7	てんかん	2:6	2:6	2:5	
I子	4	96. 12. 18	9:10	てんかん	2:4	2:2	2:7	
O子	4	96. 12. 9	10:7	もやもや病	2:3	2:7	1:9	
B男	5*	97. 5. 12, 5. 13	10:5	MR	2:6	2:8	2:4	
N男	5	96. 12. 12	10:11	自閉的傾向	2:8	2:8	2:7	3歳前半児群 (2次元形成期)
K男	1*	97. 4. 23	7:10	てんかん	2:11	2:4	3:5	
S子	2	96. 12. 12	7:11	ダウン症	3:2	3:2	3:1	
E子	5	96. 12. 13, 97. 3. 14	10:11	ダウン症	3:3	3:4	3:2	
D男	6*	97. 4. 21, 5. 12	11:3	てんかん	3:5	3:5	3:5	3歳後半～4歳児群 (2次元可逆操作期)
U男	2	96. 12. 9, 97. 3. 11	8:8	染色体異常	3:7	3:11	3:4	
G男	5	96. 12. 20, 97. 1. 20	11:2	脳腫瘍後遺症	4:2	3:9	4:7	

学年は実施時 *は1997年度の学年、他は1996年度の学年

**全領域は認知・適応領域、言語・社会領域の得点の平均から算出

(3) 表-5、表-6について

本校では、いろいろな文献（田中昌人・白石正久の著書、渡部昭男の研究資料及び、新版K式発達検査）をもとに、自分づくりの段階と、その時期に大切にしたい支援や援助について、表-5にまとめた。

新版K式発達検査の結果＝全領域（ここでは認知・適応領域と言語・社会領域の平均）と、遠城寺式乳幼児発達検査や自分づくりの段階の特徴を総合的に考慮した上で、担任が定めた発達段階の結果を表-6に示す。

また、その発達段階に位置する児童に求めたい「生活を楽しむ姿」と、その段階からうかがえる「楽しめていない状況」についてまとめてみた。これは本校児童17名の実態から考えられることであり、一般的なものではない。

なお、小学部では表-5と表-6を合わせ、児童を幅広く理解することに努めた。

(4) 自分づくりの段階・本校児童の姿

表作成により見えてきた児童の実態を述べる。

自我の充実の時期から自制心の芽生えに移るまでに壁があり、この段階（3歳前半の自我と自己主張の矛盾拡大の時期）までにとどまっている児童が多い。自制心の芽生えや自制心の形成の時期にある児童の中にも、3歳前半以下の段階の特徴を残している児童がほ

表-5 自分づくりの段階表

M A	自分づくりの段階	特徴	大切なこと、援助、支え
5 歳	自己客観視のめばえ 自分づくりの始まり	<ul style="list-style-type: none"> 「もっと～したほうがよい。だからがんばろう」と意欲を持ち、目標や期待に応じて力を発揮しようとする。 自律 <ul style="list-style-type: none"> ・見通しを持って行動し、活動が持続できる。 「小」とも「大」ともいえない中間的世界があることを認識し、「だんだん〇〇する力」がついてくる。 周りの人の言動を自分なりに受け入れ話しあったり協力したりする。 <ul style="list-style-type: none"> ・自分を外から見るとどうなるかというように、視点を自分の外に作る。どんな伝え方をしたら理解されるかと、相手の心の中に入って考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 間違いを指摘するよりも、自分の力で活動を修正していけるように、悩みを聞き、活動のヒントを与えていく。 活動表現の中にある良いものを選び出し、他者でない自分を強く意識できるように援助する。 大きな目標を動機づけることで、集団のすばらしさを知る。
4 歳後半	自制心の形成	<ul style="list-style-type: none"> ことばが行動を調整するので、積極的な自制心を育てる。 その日あったことやできごとを、接続詞を使って複文で話せる。多弁になり、ことばが生活をつくるようになる。 いっしょに遊ぶ友だちを求め、ごっこあそびがさかんになり、役割を果たすことに喜びを見いだす。 理由がわかって大人の評価に従って行動するようになるが、自分の理由を上回る理由を前にしたり、楽しみにしていた約束が破られると、やりばのない怒りをぶつけてくる。 	<ul style="list-style-type: none"> この時期の指吸いは「相手の話を聞きながら思いをめぐらす」という「ながら」行動だと理解する。 自分を評価してくれる大人の前で、コチコチになる時、無理に話させようとせず、友だちと話す機会をつくる。
4 歳前半 3 歳後半	自制心の芽生え もう一人の自分	<ul style="list-style-type: none"> 葛藤を乗り越えた安心感から、「からだ」「えがく」「つくる」「ことば」でも自らの表現が広がる。 ～してから～する心を持つ。 イメージの世界の広がりは、ことばでの表現をかりたてる。 きたないことば、過去形、未来形を使い始める。 意図のもとに、動作が次々と展開するようになる。 年下の子のできることをいっしょにやり、導いたり、顔などつままれてもがまんできるようになったりする。 大人になりたいと思う。 <ul style="list-style-type: none"> ・同性で遊ぶことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> じつくりと待つて聞くようにする。 早く！などとせかささない。 自分で最後までしたい願いを尊重しつつ、いつでも支えるようにする。 言いたいことを理解し、パラレルトーク、モデリングする。 緊張しないで会話ができる雰囲気をつくる。
3 歳前半	自我と自己主張の矛盾拡大 もう一人の自分	<ul style="list-style-type: none"> 大きい自分、かっこいい自分になりたい気持ちが「じょうずにできるかな」と葛藤を引き起こし、苦手なことをより感じ取ってしまう。 見つけられている自分がわかり、引っ込み思案になる。 新しくできるようになったことは、どこまでも自分でしょうとし、手伝いをこぼむ。 人の求めていること、好きなことがわかってしようとする。 貸し、借り、順番、交代が見られる。約束、依頼、脱得がわかる。 <ul style="list-style-type: none"> ・大人扱いを受け止める。 	<ul style="list-style-type: none"> その子の得意なこと、好きなことでアピールする。 苦手なこともあるけれど、得意なことにもあることに気づくことができるようにする。 終わりよしの気持ちが持てるような舞台を演出する。
2 歳後半	自我の充実	<ul style="list-style-type: none"> 大きい物に価値を見つける。大きい自分を求める。 自分との関係の強弱で、自我を制御し始める。 いったん配った他の人のものには手をつけず、新しい追加配分が必要になったときには、自分のが少なくなってもわけることができ始める。 道具を媒介に2人で組んだごっこの活動ができる。 人形の世話をするようになる。 問いと答えの関係が成立し、聞くことを面白がり、理由を言ってみる。 	<ul style="list-style-type: none"> がまんした自分を認め、ほめる。 がまんでなくても「ほんとうはがまんしたかったんだよね」と心の中の葛藤をこぼす。 大きい自分、お兄ちゃんの自分、賢い自分を選んだことをほめてはげます。 小さい子の世話ができるようになる。
2 歳前半	自我の拡大	<ul style="list-style-type: none"> 「もっと！もっと！」の心で、自分の欲しいものがあると強く要求する。 何でも独り占めしたい、自分に最大、他に最小の配分をする。 「～したら～」「～してから～」と言われて2つの関係がわかる。 描いたり作ったりしたもの、意味をつけ始める。 語の活用が始まるとともに、動詞を使った2語文を話す。 「もうひとつ」「もうすぐ」「ここは」「それだけ」等の、対応や対比のための指示語や要求や指示のための対話が芽生える。 	<ul style="list-style-type: none"> 単純な遊びでも、イメージがあってする「みたて・つもり」を大事にする。 欲張りな心、自分の世界を守ろうとする心を大切にしながら、「～したら～しようよ。」と、提案し、少しでもがまんできたことを認める。
1 歳後半	自我の誕生 感情・意欲の育ち	<ul style="list-style-type: none"> 「～ではない～だ」という活動スタイルをする。 表現語が増え命名を中心に使える言葉が30語前後となる。 場面が変わるとなじむために「心の杖」を使う。 自分の持ち物に対する執着心を持ち始める。 高い所、暗い所等抵抗のある世界に挑戦していく。 かみつく、髪の毛を引っ張る、相手を倒す。 だだをこねるが対の選択場面で気持ちの転換や立ち直りができる。 <ul style="list-style-type: none"> ・自分の名前を出して要求する。 <ul style="list-style-type: none"> ・模倣をする。 相手に名前を聞かれたら自分や友だちを指し、相手をみる。 	<ul style="list-style-type: none"> 「自分の物」をはっきりさせる。 だだこねをするが、立ち直りのきっかけを探る姿を見守る。 心の高まりを友だちと共有しうる場をつくる。 セルフトーク、リフレクティング、エキスパンション、モデリングをする。
1 歳前半		<ul style="list-style-type: none"> 「～だ」という活動スタイルをする。 1語文を数語話す。 いいものさがしをする。 生活の主人公になりたい心を持つ。 「～してから～する」という簡単な関係がわかる。次の楽しいことのためにがんばろうとする見通しの力の芽生え。 子ども同士の共同注視が見られ始める。 自分にも他人にも名前があることがわかる。 共感の指さしが現れるなど、ことばの土台ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 発見の喜びが味わえるようにし、共感し、ことばをそえる。 いいものさがしの中で、友達へのあこがれの心を育む。 遊びの楽しさを極限まで高め、楽しみの拠点を作る。 大人を心の支えとして世界を広げる。 SOUL(ソウル)を守り、ミラリング、モニタリング、パラレルトークをする。

表-6 本校児童の姿

児童			理想とする生活を楽しむ姿	楽しめていない状況
1組	2組	3組		
			<ul style="list-style-type: none"> ・多少のつまずきや、失敗を乗り越えて、自分でできたことへの満足感を持つ。 ・決まりやルールを守りながら、いきいきと学習や生活に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども同士のグループで遊ぶ際のルールがよくわからない。
			<ul style="list-style-type: none"> ・じっくりと落ちついて取り組み、自分でやり遂げる。 ・友だちと仲良く楽しんで遊ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・他の人のことが気になり、自分で決断しにくい。
		○G男	<ul style="list-style-type: none"> ・心が、安定した状態である。 ・幅広くいろいろなことに興味を持って、いきいきと遊ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・汚いことばを使い周囲から止められる。
	○ U男 K男 ○S子	○D男 ○E子	<ul style="list-style-type: none"> ・する事がわかって自分から行動する。 ・先の楽しみを見通し、少しは我慢する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自制心が弱いため、自分の楽しみの追求と現実の生活とのギャップについていきにくい。 ・失敗にぶつかったらなかなか立ち直りにくい。 ・関わりたいという気持ちの表れの誤学習をしたり、ちょっかいを出して、ふざけて遊んだりする。
○Y子 ○ ○ T男	○ C男 ○ ○ OM男	○ ○ ON男 ○ ○子	<ul style="list-style-type: none"> ・自分でしたいあそびを見つけて没頭する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・目の前の事が気になり注意散漫。 ・同一のあそびばかりに没頭し、発展性が少ない。 ・自分の見いだした楽しみが反社会的であったりするため、周囲の人から止められる。 ・自己中心的で先生を相手にしてなら遊べるが、友だちとは遊びが続きにくい。
	○ R子 A子	○ B男 I男 ○	<ul style="list-style-type: none"> ・一つの活動に、じっくり取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己中心性が強い、待てない、自我が強い、多動でじっとできないため、深く楽しむまでに興味が移る。 ・興味関心が多方面に分散する。
H子	○		<ul style="list-style-type: none"> ・人と関わり合って共感する楽しさを味わう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・概念の弱さ、理解力の乏しさが見られ、指示待ちの傾向がある。 ・自分から、したいことが見つけにくい。 ・表出方法が未熟である。
○			<ul style="list-style-type: none"> ・五感を使って刺激を感じとり、敏感に反応する。(表出する) 	<ul style="list-style-type: none"> ・人への興味が薄い。 ・五感が未発達である。

イニシャル - 児童の自分づくりの発達段階

○ - 新版K式による発達年齢

とんどである。このことは、検査結果では認知面や言語面での多くのとりこぼしにあらわれている。

次に、表-6において「新版K式発達検査の結果」と、「担任が定めた発達段階の結果」に差（ずれ）が出ている場合について考察をする。一つには、検査の状況により実態がうまく検査結果に表れない場合がある。もう一つには、担任の判断基準が、段階表の達成している部分を見るか達成できていない部分を見るかによっても判断が異なってくるということがある。

さらに2歳児群について、検査結果との差について考える。小学部児童17名中9名が2歳代であり、半数を占めることから、特に詳しく考えてみたい。2歳児群9名中、自己-他者領域が分化している者（分化群）は4名であり、自己-他者領域が未分化な者（未分化群）は5名であった。分化群4名のうち、検査より下の段階と判断された者は1名にすぎない。ところが、未分化群5名のうち3名（60%）が、検査より低いレベルと判断されている。

また、未分化群は、検査の困難さ、一緒に活動することの難しさがあり、“本人も周囲の者も共に生活を楽しむ”という観点では重要な視点と考える。

これらのことから、自己-他者の領域を分化させていくことが、次の段階につながる手がかりになると考えた。

(5) 生活を楽しむ姿と楽しめていない状況

障害のある子には、一般的な発達や、普通に葛藤を乗り越え育っていく心の成長の道筋ではとらえきれない難しさがある。特に、自閉症では「楽しさや意味を共有して活動すること」がなかなか難しい。ダウン症では、自分なりの考えはあるが、周りの状況を把握したり、見通しを持ったりしながら取り組むことがなかなか難しい。

難しいながらも葛藤を乗り越え、発達の壁を越えていったと思われる児童・卒業生たちの姿には、生活を楽しむ姿も多く見られる。発達の壁を乗り越えようと葛藤を繰り返している児童も、楽しめている状況はたくさんあるのだが、乗り越えた者からは、乗り越えた安心感から来る余裕を持った楽しみ方をしているという印象を受ける。

(6) 小学部の実態からの考察

- ・発達の壁や、発達障害という困難さを考慮しながら、今楽しめていること、できることを大切に、指導に当たりたい。
- ・さまざまな発達段階、課題の17人の子どもたちが、合同で学習していく際の目標設定や支援方法の難しさが見えてきた。一人ひとりの実態を考慮しながら、今後一層クラス単位の学習、グループ学習、個に応じた学習のあり方を求めていきたい。
- ・自己-他者の分離のできていない児童においては、指導の方法や支援の方法に特に工夫が必要である。
- ・自己-他者の分離ができた児童については、できない自分を感じ取り、自信を失ない引込み思案にならないよう支援していかなければならない。

※授業づくりにおいて、以上の実態を考慮した題材選定や支援のあり方を求めていくことが大切である。

（岡村清）